
脅迫メール 改変ver

結城陸空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脅迫メール 改変ver

【Nコード】

N2231L

【作者名】

結城陸空

【あらすじ】

あたしの携帯に來た、謎のメール。それは驚愕する内容だった。

(前書き)

以前投稿した脅迫メールの改変verです。改悪になってないことを願います。

内容はそのままですが、展開が少し変わっています。

以前読んで頂いた方も、はじめて読んで頂ける方も楽しめる内容となっていると思います。

『赤ん坊を降ろせ』

こんなメールが来たのは、あたしが買い物に行った帰りのことだった。夕ご飯の買い物に来ていた時に、突如メールの受信の着信が鳴り響き、受信したメールを見ると、まったく知らないアドレスからの、メールを受信していた。

正直、最初このメールを見たときは、ただの悪戯だと思った。むしろ最近多い迷惑メールの類だと。誰だってそう思うだろう。しかし、あたしはこのメールの内容が悪戯や迷惑メールではないことを、すぐに知ることになる。

あたしには、家族がいない。あたしの両親は早くに亡くなったし、夫は半年前に他界。夫の両親とは仲良くなかったので一人身だ。でもそんなあたしにもようやく家族が出来る。あたしのお腹には妊娠して半年目に突入した、赤ちゃんがいる。亡くなった夫が残した、あたしと夫の子。少しお腹が膨れているのがとても嬉しい。

——あたしのお腹の中にいるのは、あたしの大事な大事な赤ちゃん。

そんな晴れやかな気分で買い物に向かった帰りだった。このメールが突然携帯に送られてきたのは。あたしは悪戯だと思ったので、気味が悪いと思いつつも、そのメールをすぐに消して、携帯を閉

『あ、柳瀬さん？ 今日とは定期健診の日ですよ。病院で待ってます
んでちゃんと来て下さいね』

あたしは不安や恐怖を拭い去る声に、胸を撫で下ろした。産婦人科の先生からだった。この人には妊娠が発覚した時から世話になっている。産婦人科と整形外科を構える病院の院長先生だ。こんな電話をかけてくるのもあたしが、この間の定期健診に行かなかったからだ。ただ忙しくて行く暇がなかったただけなんだけど。

あたしは知っている声の主からの電話に安堵し、病院に行くために買い物袋を家に持って帰った。そして荷物を降ろし、車に乗り込んで病院へ向かう。もうあたしの中ではさっき届いた不思議なメールのことなど、すっかり消えていた。

病院に着いたあたしは、少し順番待ちをした後、院長のいる診察室へと呼ばれた。

「やあ、どうだい？ お腹の状況は？」

「あ、順調だと思います」

「うん、顔を見ると幸せそうだよ」

「え？ あ、ありがとうございます」

少し頬を赤く染め、テレ笑いをしながら答える。そんな恥ずかしいことを急に言われるとは思わなかった。ただ、少し嬉しかった。あたしは今、他の人から見ても幸せそうなんだ、と。

「それじゃあ、そこに横になってくれるかな？ 音波検査をしてみよう」

そう言われあたしはベッドに横になった。

「ホラ！ 見てみて半年の君の赤ちゃんだ」

先生に言われて、画面を見ると確かになにかが映っていた。これが赤ちゃんなのか。半年ということでかなり人の形を成してきてる、

不思議な感覚ではあったが、実感はあった。あたしのお腹には、今一つの命が確かに息づいているのだ。これほど感動的なことはない。

検査が終わり、あたしは帰宅した。そしていつものように一人でご飯を食べ、お風呂に入り、布団に入って静かに寝静まった。一人暮らしは、気楽でいい。確かに寂しさはあるけど、あたしには赤ちゃんがいる。あたしは毎日寝る前にお腹を摩り、赤ちゃんに話しかけることが、日課となっていた。

翌朝、いつもと変わらない朝だ。しかもとても天気がいい。こんな日は散歩にでも出かけよう。赤ちゃんもきつと喜ぶ。そう思いあたしは自分のお腹に手を乗せた。

「……え？」

あたしは、お腹に違和感を感じ、その自らの目でお腹を確認する。お腹を確認したあたしは、しばらくの間、なにも認識できなくなつた。なぜなら、まったく膨らんでいないお腹があったから。なんの膨らみもなく、なんの鼓動も感じない。

「え……え？ ど、どういうこと？ え……そんな！？ あたしの……っ!？」

あたしは激しく動揺した。いや、動揺なんてレベルじゃない。お腹の中にいたはずの赤ちゃんが跡形もなく消えているのだ。あたしはコレは夢だと疑った。そうだ、今起きたばかりで、あたしはまだ寝ぼけている。あたしは、一呼吸置き、再びお腹に手を乗せ、目で確認する。

けど、次にあたしが起こした行動は、飛び起き、化粧もなにもせず、ご飯も食べずに、着替えもせず急いで、すぐに病院に向かうことだった。病院についたあたしは、カウンターにいる看護師の人に先生を呼んでもらった。たまたま手が開いていたのか先生はすぐにやってきた。

「せ、先生！ あた……あたしの、あたしの赤ちゃんがっ！」

あたしの、病院中にも響き渡るのではないかという、大きな声に先生は驚いた表情をしている。

「あなたなんて格好で……、とりあえず、落ち着いてください。柳瀬さん。大丈夫ですか？」

「あたしの……赤ちゃんがいないんです！ どうして！ なんで！ あたしの……」

「ちょっと柳瀬さん……。あまり激しく動かないでください」

先生は妙に落ち着いている。周りのみんなもあたしの顔を見ている。混乱しているあたしを見ている。

「でも！ あたしの……赤ちゃんが……」

動揺に動揺を重ね、混乱し周りがまったく見えなくなって、わめくあたしを見て先生が言う。

「だから、落ち着いてください。赤ちゃんってなんですか？ あなたに赤ちゃんはいませんよ」

先生のその言葉にあたしの声は止まった。一瞬、時が止まった感覚に陥った。

「え？ な、なに言ってるんですか？ だって昨日も……」

「昨日？ 昨日は、あなたはその怪我した足の治療に来たんじゃないですか？」

先生のその言葉を聞いて、あたしは自分の足を見る。すると膝の部分に包帯が巻いてあった。身に覚えのない傷に包帯。

「嘘……だって昨日も定期健診にきて音波検査したじゃないですか」

あたしの言葉に先生は少し、呆れた顔で答える。

「昨日は、あなたは確かに定期健診でした。足のね。包帯やガーゼを替えてX線写真を撮ったんです。覚えてませんか？」

先生の受け入れがたい言葉に、あたしはさらに動揺する。

「嘘……嘘よ！ だって昨日は確かにあたしのお腹の中には……ちゃんと見たのよ。……先生だって産婦人科の先生でしょ？」

先生は、再び驚きの表情を浮かべている。周りの人も驚きの表情

を浮かべている。

「柳瀬さん。ここは、整形外科だけで、産婦人科はありません」

先生は、冷静に答える。周りのみんなは近くの人とヒソヒソ話でした。

「嘘、嘘、嘘!!」

あたしは、先生達の横を走って、通りぬけ昨日音波検査をうけた部屋へと走る。

「あ、ちよつと柳瀬さん!!」

みんながあたしを騙している。あたしは、確かに赤ちゃんの検査を受けていた。昨日までお腹も膨れていたし、感覚もあった。それが突然なくなるなんて馬鹿なことがあるはずがない。昨日検査を受けた場所へとやってきた。あたしは走ってきたいきおいでドアを激しく開ける。

そこにあったのは、暗い物置倉庫だった。目でみても分かるくらい何年も使われていない。掃除もされていないような部屋。立っていられなくなったあたしはその場に座り込んだ。眼からは大粒の涙が流れてくる。信じたくなかった信じることができなかった。あたしはいつからおかしくなったの？

しばらくして先生達がやってきた。

「柳瀬さん、大丈夫ですか？」

あたしは看護師の人に助けられ、立ち上がる。

「柳瀬さん一度精神科のほうで見てもらったほうがいい、いい病院を紹介します」

あたしは、狂っているの？ 確かに記憶があるのに。お腹に赤ちゃんがいた記憶が。でもいまこの現実でお腹にその感触はない。あ
るの
は
身
に
覚
え
の
な
い
脚
の
怪
我
だ
け
。

「……？ え？ ……先生、あたしこの足の傷どこで？」

「あなたから聞いた話だと、階段で転んで打ったと聞きましたよ。」

それで足の膝の骨に軽い亀裂が……」

「階段って、家の階段ですか？」

「いえ、神社って言ってたじゃないですか？ 確か、大北神社だったかな？」

大北神社……聞いたことがある。確かあの神社は、安産祈願で有名だったはず。なんでお腹に赤ちゃんのいないはずのあたしが大北神社に？

「とにかく、今日は家に帰って休んだほうがいい。精神的疲労から来る混乱かもしれないから」

先生にそう言われたあたしは、とりあえず家に帰る。ただ自分で運転して帰れる状態じゃなかったもので、送ってもらったのだが。

家に着いたあたしは、居間にあるソファに座りお腹を触る。なんの感触もない。ほんとに幻だったの？ そう思うとまた涙が出てきた。涙が出て止まらなかった。そんな、時あたしのポケットから携帯が滑り落ちた。

「……攜帶」

あたしは気が付いた。昨日来ていた変なメール。あたしは携帯をすぐに開き、メールの確認をする。そこには確かにあった。

『お腹の赤ん坊を降ろせ。そうすればお前の命は助けてやる』

[illegible]

今見ても気持ちが悪い。でもそれより確かにこのメールは存在している。ということは間違いないく、あたしは赤ちゃんをこのお腹に宿らせていたということ。でも朝起きたらそれはなくなつて。病院も……。意味が分からない。

と、その時メールの受信画面に突然切り替わった。

「え？」

驚いたあたしは画面に食い入るように見る。受信されたメールは、また知らないアドレスからのものだった。

『降ろせ』

その一文だけだった。どういうこと？ あたしは余計に混乱した。降ろせて、赤ちゃんを降ろすということなのか。もうあたしの中にはいないのに。それなのにまたこんなメールが。

みんなあたしの気が狂ってると思っている。でも確かにメールには赤ちゃんを降ろせと書いてある。このメールがあるということは確かに赤ちゃんは存在していたということ。ということは病院はグールになってあたしを騙している？ でも確かに昨日寝るまでは赤ちゃんがいたのに、急に消えるなんてそんなこと。

その時、電話がかかってきた。病院の先生からだった。

『あ、柳瀬さん。精神病院の先生に言っておきましたので言ってください。場所は――』

「先生、嘘ですよね？ あたし、やっぱり赤ちゃんいましたよね？」

『……、柳瀬さん。精神病院で一度見てもらってから……』

「その必要はないですよ。赤ちゃんがいた証拠があるんです。間違はなくあたしのお腹には赤ちゃんがいました。そして病院でも見てもりました」

『……』

「先生が、盗ったんですか？」

『え？』

「返して……、返してください！！ あたしの赤ちゃん！！」

『……がッ……ババッ……プッ……おろ……ろせ……』

「え？」

あたしは、電話機の向こうから突然聞こえてきた謎の音に耳を傾

けた。

『……』

なにも聞こえない。気のせいだったのだろうか。

「せ、先生？」

『……赤ん坊を降ろせ』

地獄の底から、搾り出すような声を聞いた途端携帯を落としてしまった。それもそのはずだ。今の言葉は、あのメールの内容そのままだ。あまりに驚いたため、あたしの身体は動かない。落とした衝撃で電話は切れたらしい。また電話がかかってきた。でも身体はなぜか動かない。しばらくコールが鳴った後、留守電に切り替わった。『ピーー。……降ろせ。赤ん坊を降ろせ。降ろせ。赤ん坊を降ろせ、降ろせ、降ろせ、降ろせ、降ろせ』

その声は、留守電が録音する時間ずっと流れていた。意味がわからない。あたしのお腹には赤ちゃんがいない。突然消えたのだ。赤ちゃんを降ろせと言われてもない。降ろせない。どうすればいいの？

「あたしにどうしろって言うの？」

あたしは、ポツリと呟いた。その時、あたしは気が付いた。

「そうか、なんだ簡単なことだった。あたしのお腹の中には今も赤ちゃんがいるんだ」

あたしは、力なき足で立ち上がると、フラフラっと台所に向かう。そして、棚からある物を手に取った。それは包丁だった。

「待っててね。あたしの赤ちゃん。今、出してあげるから」

あたしは、手に持った包丁を振り上げる。

そして自分のお腹目掛けて、なんの躊躇いもなく振り下ろした。

『先日、アパートの一室で女性の死体が発見されました。亡くなったのは、柳瀬かなでさん。二十七歳。女性は包丁で自らのお腹を切り裂き、臓物を大事そうに抱えて亡くなっており、警察ではこの件を自殺と断定し……』

『専門家の先生は、この猟奇的自殺をどう見ますか？』

『一種のストレス障害でしょう。他の動物でも極まれに見られるのですが、いわゆる”想像妊娠”というものだと思います』

世間は連日、この話題で盛り上がっている。夫を亡くしたことで精神的に病んでいた。それが原因の想像妊娠だと思う。妊娠したと勘違いしたあたしの心と身体は、それに備えはじめ母性本能が出てきた。それに伴い、神社へと安産祈願、その帰りに階段から落ちたあたしは、病院への通院、定期治療。

その間も、あたしの中の勘違いは大きくなっていく。そして半年。あたしの想像妊娠は終わった。

あのメールや電話は、きつとまともなあたしが残したメッセージだったのかも知れない。

”想像の中の赤ちゃんを降ろさないと、自分の命が危険にさらされる”という意味の自分に向けた生きることへの最後のメッセージ。

了

(後書き)

いかがだったでしょうか？
感想など頂けると、踊って喜びます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2231/>

脅迫メール 改変ver

2010年10月19日02時40分発行